講道館柔道 十段物語

第13回
「欧州柔道発展に貢献」　安部 一郎

聞き手：宮崎　淳

取材当日、4階の参与室から3階の会議室へ続く階段を歩いて降りる安部一郎十段の足取りは、90歳とは思えないほど軽やかだった。背筋を伸ばして椅子に座り、鮮明な口調で語られていく過去の経歴は、群馬県旧制前橋中学時代から始まった。

柔道との出会い

――先生は、旧制前橋中学のご卒業と聞いておりますが、群馬県出身ということでよろしいでしょうか。

安部　いや、生まれは秋田県です。父が国家公務員だったものですから、転勤で日本の各地を回りました。両親が山形県生まれですから、本籍は長く山形県にありました。その後、宮崎県や岐阜県などを経て、中学生の頃には群馬県の前橋に住んでいました。そのため、旧制の前橋中学へ進学しました。

――柔道は、旧制前橋中学で始められたのですか。

安部　そうですが、初めから柔道をしようとは考えていませんでした。

――では、どのような経緯で柔道と出会ったのですか。

安部　当時の旧制中学では、普通の体育の他に、軍事教練や武道の時間がありました。武道の時間は柔道と剣道の選択制になっていまして、私は柔道を選びました。

――当時から柔道への興味は強かったのですか。

安部　いや、親に金銭的負担をかけたくないという気持ちがありましてね……柔道衣の方が安いでしょう。当時から剣道の防具は高価なものでしたから、柔道がいいとか剣道がいいとか言う前に、親に負担をかけたくないという気持ちの方が強かったですよ。

――先生が7歳の時に世界恐慌、17歳で太平洋戦争が始まった時代です

から、とても大変な時代に少年期を過ごされたと思うのですが。

安部　そうですね。柔道か剣道を決める時は、体型は柔道より剣道に向いていると思っていましたが、やはり、貧しい時代ですから好き嫌いを言えるような状況ではありませんでした。柔道だったら柔道衣が一着あれば出来ますから……そんな理由で柔道と出会いました。

――その後、柔道部に入ったのですか。

安部　いや、直ぐに柔道部に入ったわけではありません。柔道を授業で習い始めた頃の指導者は、警察官を定年された年配の先生でした。その先生の時は、特に柔道が面白いと思ったことはありませんでした。

その後、東京高等師範学校卒業の新しい先生が赴任されまして、名前を佐藤茂先生といいました。先生は、千葉県の安房中学から東京高等師範学校へ行かれて、卒業後すぐに前橋中学に着任されました。その佐藤先生の教え方がものすごく上手でして、柔道に興味を持ちました。特に、内股と左右の出足払が上手な先生でした。

――佐藤先生には、かなり影響を受けましたか。

安部　佐藤先生の柔道の授業が楽しくてね……その授業で初めて柔道の面白さ、理論を学びました。それで、先生や先輩方に「柔道部に入らないか」と勧められまして、私の柔道人生が始まりました。同じ時期に同級生が10人くらい柔道部に入りまして、柔道はこんなに素晴らしいものなのかと思い始めました。

――旧制中学の間、佐藤先生の下で柔道を学ばれたわけですが、その後、東京高等師範学校へ進学されたのは、どういう経緯ですか。

安部　やはり、佐藤先生が東京高等師範学校出身ということが大きかったですね。

その当時、夏休みになると毎年、東京高等師範学校の道場で、全国の中等学校から生徒を集めて一週間の講習会がありました。その講習の場に、佐藤先生が私を含む数人を連れて行ってくれまして、講習を受けたり、稽古をしたり……本物の柔道に触れる機会に恵まれました。費用も柔道部から出ましたが、佐藤先生が自ら負担をなされたと思います。

当時の東京高等師範学校の講習会には、永岡秀一先生、橋本正次郎先生、大滝忠夫先生、松本芳三先生がおられまして、その他、卒業生や高等師範学校の生徒がおられました。

――その講習会で、その後の柔道人生が始まったのですか。

安部　佐藤先生に出会い、東京高等師範学校の講習会に参加したことにより、本物の柔道と出会うことが出

来ました。そして、自分も将来、柔道の専門家になろうと考え始めました。

東京高等師範学校時代

――そして、東京高等師範学校へ進学をされるわけですが、当時は太平洋戦争の真っただ中。当時の高等師範学校の環境は……。

安部　高等師範学校2年生までは、普通に授業や柔道を出来る環境にありました。しかし、3年生の頃になると、勤労奉仕に行かされまして……栃木県に行って農家に泊まって、田んぼの開拓のようなことばかりしていました。まだそれでも3年生の頃は学校に行くことはできたのですが、4年生の頃は全く行けませんでした。

――当時は、学徒出陣もありましたが、東京高等師範学校の学生にも招集があったのですか。

安部　当時の大学生は、卒業まで徴兵延期が認められていました。しかし、戦争も激しくなると、大学生も学徒出陣で招集されました。しかし、東京高等師範学校は教員を養成していましたから、卒業まで徴兵の延期が認められました。しかし、私は、他の大学生はみんな出征して行ったのに、私たちだけ残るのには堪えられなかった。栃木県へ行って田の開墾をしている場合じゃないと思いまして、自分から志願しました。

――そして、軍隊へ行かれたわけですか。

安部　陸軍の特別操縦見習士官を受験して、戦闘機のパイロット養成の宇都宮にあった陸軍飛行学校に入校しました。最初はその近くの訓練所に3ヵ月入り、徹底的に地上訓練をやりました。

その後、宇都宮の飛行学校で飛行機の訓練が始まるのですが……まあ、当時の飛行学校の訓練は雑なものでした。それほど、早く養成しないといけなかったのでしょうが……。

訓練初日に通称「あかとんぼ」と言われる訓練機の後部座席に

東京高等師範学校体育科二年次、後列右から4人目安部一郎氏
前列右から4人目故松本芳三助教授（当時）、同5人目故川村禎三の各氏

乗せられて、上空で90度の急旋回を経験しました。もう……飛行機から落ちそうで、柔道では経験できない恐怖を感じましたよ（笑）。身体は、腰にベルトをしめているだけでしたから（笑）。

その後、離着陸を繰り返す訓練を始めて、なんと、18時間の訓練だけで、一人で行って来いと言われ飛行したのです。

――それほど、戦況は悪かったのですね。訓練生を早く戦場に出すための速成訓練だったのですか。

安部　こんなのでいいのかと思いましたよ。離陸するときはまだいいのですが、着陸が難しい。3点着陸と言って、後ろの車輪と前の車輪が同時に着地するのですが、地上50ｍ以下は目測ですよ。

――そして、訓練が終わった後は即、戦地へ行かれたのですか。

安部　いや、まだ訓練が続きました。朝鮮の海州という所へ行って、旧式の戦闘機の訓練を受けていました。「隼」なんていう優秀な戦闘機もありましたが、戦争中でしたので、訓練生は旧式の戦闘機でした。

――そこで訓練を受けた後は。

安部　今の北朝鮮の平壌の南20㎞にあった陸軍の飛行場あたりへ行って、爆撃機の部隊へとまわされました。もう、その頃にはアメリカ軍の爆撃機が空襲に来ていましたから……戦況はかなり悪かったです。そして、ソ連が参戦してきまして、私たちは列車でソウルまで移動しました。ソウルで終戦を迎えたわけですが、ソ連参戦の前には満洲へ移動する予定だったのです。

――満洲へ移動になっていたら、その後の環境にも大きな変化がありましたね。

安部　運がよかったですね。もし、満洲へ移動をしていたら、日本への帰国が数年遅れていたでしょう。

――シベリア抑留の可能性もあったのですか。

安部　十分あったでしょうね。本当に運がよかった……。その後、ソウルからアメリカ軍を避けて部隊は転々と移動をしまして、釜山から200㎞のところで、やっと武装解除されました。それまでは、戦争は終わっても軍刀は持っていましたから。そして、武装解除後は釜山まで一昼夜かけて歩いて移動し、釜山の港から博多へと帰国しました。

――帰国後は、東京高等師範学校へ復学なされたのですか。

安部　博多から汽車で東京まで帰る途中、広島を通ったら何もない野原のようでした。広島が原子爆弾でやられたという情報は、部隊にいる時から得ていましたので知っていたのですが、それにしてもすごい光景でした。その時に、本当に戦争に負け

たのだと思いました。
　そして、当時は両親が東京に住んでいましたから、実家に帰るとびっくりされました。帰るという連絡もなかなか出来ない時代ですから、生きているのか死んだのかもわからない状態で、いきなり帰ってきたのですから。そして、家で3日くらいゆっくりして、東京高等師範学校を訪ねました。
――東京高等師範学校は大丈夫だったのですか。
安部　いや、空襲であの立派な道場も焼かれまして、附属小学校を間借りして稽古をしていました。そこへ行くと、橋本先生、大滝先生、松本先生がおられまして、復学しようとしたところ、卒業になっていたのです。
――どういうことですか。
安部　私の場合半年の就学期間がありましたので、そのまま卒業扱いになっていたのです。私は志願で行きましたが、ちょうど時期が同じころでしたので、卒業という扱いになっていたのです。
――しかし、いきなり卒業になっても就職はどのように。
安部　昭和20年の10月に帰ってきたわけですが、当時の東京も焼野原。途方に暮れるのかと思っていましたが、橋本先生から「君、講道館へ勤めろ」と言われまして、講道館へ勤めることになりました。
――講道館ではどのようなお仕事を。
安部　当時は南郷次郎先生が二代目の館長をやられていまして、秘書課へ配属となりました。当時の秘書課長が子安正男先生（八段）でした。南郷館長が呼び出しのベルを鳴らすと走って行って用事を仰せつかっていました。
――講道館の秘書課では、何年くらいお勤めになったのですか。
安部　秘書課では、仕事があるときはあるのですが、ない時は全く仕事がない時もありました。午後3時くらいになると道場へ門下生が集まり始めて稽古が始まりますので、夕方は道場で稽古をしていました。そんな状況を心配してくれた同級生の播本定彦君に、大阪の旧制中学にポストがあるから来いと誘われまして、講道館を1年で辞めて、大阪へ行きました。
――大阪では教員をなさっていたのですか。
安部　同級生の播本君が当時、岸和田中学（旧制）にいましたので、私も岸和田中学にお世話になることになりました。
――そこで、柔道を教えておられたのですか。
安部　いや、学校で武道を教えることは、ＧＨＱから禁止されていた時

代です。私たち武道の教員も、一般体育を教えていました。

――では、その当時、柔道とはどのような関わり方をされていたのですか。

安部　柔道が出来るのは、警察か町道場だけでした。それで、夜になると町道場へ行って稽古をしていたのですが、東京高等師範で柔道を専門にしていた人間が行って稽古をするものですから評判になりまして、そこら辺の若い者がたくさん集まってきました。大阪府の大会にも参加して勝つものですから、岸和田警察からも声がかかり、授業の合間に指導へいくこともありました。

――旧制岸和田中学の教員は何年間やられたのですか。

安部　岸和田中学に勤めて1年後に、岸和田中学は近くにあった女子中学と合併しまして、旧制中学から新制の高校となり、生徒も半分ずつ分かれました。

　同級生の播本君は、旧制岸和田中学から岸和田高校となった学校に残り、私は女子高から和泉高等学校になった学校で勤務をすることになりました。

　しかし新制の高校になっても、武道はまだ禁止でしたから、体育の教員として勤務していましたが、相変わらず柔道は町道場でやっていました。そこで、大阪府の柔道大会で私の試合を見た堺警察署長から声がかかりまして「警察に勤務して柔道を教えてくれないか」と。そんなことを言われましても、私は同級生の播本君の関係で大阪まで来たわけですから、教員を辞めて警察に勤務することは考えられませんでした。

　しかし、堺警察署長の熱心な勧誘があり、私も柔道が出来ることを望んでいましたので新制になったばかりの和泉高等学校を1年間で辞めて、柔道教師として堺警察署へ勤務することになりました。

――今の制度で考えますと、警察の試験を受けて、警察学校入学、卒業後に勤務となるわけですが、当時もそのような過程を経て勤務されたわけですか。

安部　私の場合は自治体の警察から直接依頼を受けて指導者となりました。採用も、警察署長の独断で出来た時代です。

　しかし、私の身分は警察官ではありませんでした。職員として、立場は柔道の師範という待遇で、警察署内では警部待遇で優遇ということでした。

　毎朝、朝礼の後に、柔道と剣道の稽古をやってから、警察官は勤務に行っていました。私は、毎朝、堺警察署に出向いて、警察官に稽古をつけていました。

――稽古が終わるとどうしていたの

ですか。

安部　そこなのです。警察署長が約束された通りに、給料も待遇も教員時代よりも良くなったのですが、午前の稽古が終わると、特に仕事がありませんでした。戦争が終わり、やっと柔道が出来る環境になりましたが、昼間は署内の机に向って勉強をしたり、指導の計画を立てたりしていました。その他はこれといって何もやることのない時間を過ごしていました。

柔道が出来るようになったのはよいが、本当にこれでいいのかと、勤務も2年目になった頃、恩師である松本先生からお呼びがかかったのです。

――どのようなお話があったのですか。

安部　フランス柔道連盟から、講道館へ指導者派遣の依頼が来ました。堺警察署では大変お世話になっていたのですが、このまま警察で柔道の師範をして過ごしていてよいのか。まだ若かったですから、海外へ行って柔道をするのも面白いなと思いまして、話を受けることにしました。

当時、講道館には国際部というものはありませんでしたから、海外との交渉は松本先生が全てやっていました。松本先生からフランスから要請が来ているので行ってみないかと言われました。その当時の日本はまだ終戦後でみじめな生活をしていました。前にアメリカの軍人を講道館で指導した経験もありましたので、堺警察署を辞めてフランスへ渡ることを決意し、昭和26年10月にラ・マルセエーズ号という船に乗って、フランスへ行きました。

フランスへの道

――当時は、飛行機ではなく船ですよね。困難な渡仏だったのでは……。

安部　フランスまでは、横浜から香港、マニラ、サイゴン、セイロン、スエズ運河を経て30日間をかけてマルセイユに到着しました。

困難どころか、貧しかった日本から見れば、夢のような旅でした。フランスから送られてきたのは一等客船の切符でした。レストランでは見たこともない料理が並んで、ワインの味なんか知らないものですから（笑）いくら出されても飲みませんでした。食事は美味しいものでした。……とても楽しくて夢のような船旅を過ごさせていただきました。フランスに柔道を指導に行くということで、フランス人のクルーたちがよくしてくれました。

――当時のフランスの柔道事情はどのようなものでしたか。

安部　私は、南部のトゥールーズに派遣されました。その頃ヨーロッパ

では、ヨーロッパ柔道連盟のようなものはありましたが、まだ活発に動いている時代ではありませんでした。イギリスでは小泉軍治さんという方が指導をされていて、きちんとした柔道が伝えられ、行われていました。しかし、フランスのパリを中心としてやられていた柔道は、柔道と言えるようなものではありませんでした。

――どのような柔道だったのですか。

安部　当時、フランスで行われていたのは川石式柔道というものでした。川石式とは、川石酒造之助という方が始められた柔道でして、講道館柔道とはかなり違うもののように宣伝されていました。

――どのような柔道だったのですか。

安部　まず、技に理論がありませんでした。教え方も、単に技の形に入る方法だけ教えて、崩しとか作りは全くありませんでした。力任せに技に入るものですから、技が美しくないですし、技に理論もない。崩し、作り、掛けの理屈を無視した柔道でした。それに、技を番号で呼んでいました。

――技を番号で呼ぶとは、どういうことですか。

安部　川石式柔道では、どうせ、ヨーロッパ人は日本語で技の名前など覚えられないと。その理屈から、技に番号を付けていました。例えば、足技1番といえば大外刈、手技1番といえば背負投というように、全ての技に番号を付けて、番号で技を呼んでいました。しかし2年で川石式柔道は崩れ去りました。

技・審判法を日本語へ

――そのような異質な環境で先生はまず、何から始められたのですか。

安部　私が最初に行ったのは、トゥールーズにある修道館という道場でした。ここでは、ラッセル兄弟という三兄弟が指導をしていまして、三男はイギリスの小泉さんの所で修行をしていました。ですから、修道館では講道館柔道が行われていました。

　ですが、ここでもやはり、技は掛けに重点が置かれ、崩しと作りの理論が出来ていませんでした。そこで、私は崩し、作り、掛けという理論を説明しながら正しく講道館柔道の技を教えていきました。

――当時からフランスでは柔道は盛んに行われていたのですね。

安部　川石式柔道はかなり盛んに行われていました。道場をやれば儲かるものですから、かなりの数の道場があったと思います。褒められるような柔道は少ないものでした。

――先生がフランスへ行かれてか

ら、正式な講道館柔道がフランスで行われるようになったのですね。

安部　私は、技も審判法も、全て日本語で覚えるように指導しました。日本で生まれた柔道ですから、日本語でやるのが当然だと思いました。しかし、当時のヨーロッパでは、その国の言語で審判をしていました。正しい柔道の技術を教えることと、正しい日本語の用語を使うことに、精力を注ぎました。そして、川石式柔道を教えていた指導者たちも、全国から私のところに来て講道館柔道を学ぶようになりました。

しかし、フランス柔道連盟はその後、2つに分かれました。

――なぜ2つに分かれたのですか。

安部　川石式柔道をやっていたグループと、それに反対し正しい講道館柔道をやっていたグループで対立がおきまして、連盟が2つ出来てしまい講道館柔道フランス連盟が発足しました。そうしているうちに、契約期間である2年間が終わり、私はフランスを去ることになりました。

――そして、ベルギーへ行かれたのですね。

安部　当時のベルギーでも、指導者は川石式柔道を経験した先生でした。しかし、私がフランスで行っていた講道館柔道の指導がベルギーにまで伝わり、是非、ナショナル連盟のテクニカルディレクターとして来てくれとの誘いを受けたので、行くことに決めました。ですが、話を受けたのがフランスとの契約終了半年前でしたので、半年待ってもらい、その後、ベルギーへ移動しました。

――ベルギーではナショナルチームのテクニカルディレクターということですが、具体的にはどのようなお仕事をされていたのですか。

安部　とにかく、現場は全て任されました。それまで、川石式柔道に染まっていた柔道を、本来の講道館柔道で教えました。日本と同じように、指導計画を作り、体制を整え技の理屈を教えていき、1年も経たないうちに、ベルギーは講道館柔道が主流となりました。

その後、ヨーロッパ中の国々から要請がありました。また、ヨーロッパ柔道連盟から要請があり、ヨーロッパ各国で講習会を行うようになりました。ヨーロッパ柔道連盟の技術顧問という立場になりまして、ベルギーに拠点を置いていましたが、ヨーロッパ中へ指導に行きました。

――その頃もフランス柔道連盟は2つに分かれていたのですか。

安部　いえ、私がフランスを去ってから1年後くらいに、フランス政府から正式に柔道連盟を認めて補助金も出すから、1つになりなさいという勧告があり、連盟は1つになりました。そして、川石式柔道ではなく、

講道館柔道が正式にフランスの柔道として認められました。ですから、私の講習会にはフランス柔道連盟の指導者も参加していました。

――1953年ヨーロッパ柔道連盟技術顧問になった頃から、先生の指導でヨーロッパ柔道が今の形へと変わっていったのですね。

左 故 平野時男氏(注1)と指導前の打合わせ（ベルギーにて） 昭和34(1959)年

安部 それまでは、統一された審判技術というものがありませんでした。各国の言語で審判をしていたので、これでは駄目だと思いました。それで、ヨーロッパ柔道連盟主催の講習会や各国の講習会では、とにかく、柔道の用語を日本語に統一することに精力を注ぎました。

ベルギー・ブリュッセルでの指導風景 昭和35(1960)年

当時のヨーロッパ柔道界は、今と違って日本に学ぼうという姿勢がありましたから、比較的スムーズに受け入れられましたし、反発もありませんでした。やはり、日本の文化である柔道は、日本語で統一すべきだと考えていましたから、当時、IJFのテクニカル顧問であった川村禎三さんにもだいぶ相談したり、アドバイスをしたりしていました。

――そして、18年にも及ぶヨーロッパでの指導を終えられて日本へ帰国されるのですが、ヨーロッパを去る時はどのような心境でしたか。

安部 当時のヨーロッパ柔道連盟は比較的素直に私の指導を受け入れてくれましたが、それでも今のような柔道になるのに十数年かかりました。私が帰国する頃には、普通に柔道の用語が日本語を使うようになり

ましたが、これはヨーロッパ各国柔道連盟の努力の結果でもあります。

請われるままにいろいろな国に指導へ行きましたが、どの国も熱心に私の指導を受け入れてくれました。そして、これで世界に通じる柔道が出来上がったと確信して、18年間のヨーロッパ生活を終えて帰国の途につきました。

講道館国際部長としての責務

――1968年に帰国して、69年から講道館国際部長となられましたが、どのような点に重点を置かれましたか。

安部　講道館は、日本だけのものではありません。世界の講道館ですから。世界で指導をする講道館柔道の体制をつくる必要がありました。私はヨーロッパに長くいましたが、アフリカだって同じことです。正しい柔道の精神と技術を伝えることが、講道館の役割なのです。

ただ、当時のヨーロッパはアフリカやアジアに植民地がありましたから、ヨーロッパで教えたことが、そのままアフリカやアジアの国々に浸透していったということもありました。

昔も今も、講道館には世界中から選手や指導者が講習会を受講しに訪れます。だが、逆に講道館から発信していかなければならない。こちらから世界各国の要望に応えて、多くの日本人指導者を世界中へ派遣していきました。

昭和50(1975)年全日本選手権大会「投の形」の演技
取 安部一郎八段・受 中村良三五段

オーストリア・ウィーン　ＩＪＦ総会日本代表
右 安部一郎氏・３人目 故 松本芳三氏
昭和50(1975)年10月22日

日本は外国から見れば、柔道のメッカです。日本で始まった柔道を、世界に正しく伝えていくのが役割だと考えています。

――現在のヨーロッパ柔道について思うことはありますか。

安部　柔道がオリンピック種目になってから、ヨーロッパ各国の柔道に対する考え方が変わりました。各国ともオリンピックで勝つために強化を始めました。それも、目の色を変えて強化、強化と、試合で勝つことを大きな目標としています。

平成24年 寒稽古で打込をされる安部十段

オリンピック種目になったことによって、世界の柔道として認められたという利点はありますが、競技力だけに偏ったことは残念です。競技としての柔道も大事ですが、もっと大切にしないといけないものもあります。それは「精力善用」「自他共栄」という柔道本来の目的を普及することです。

若者たちに伝えたいこと

――競技以外で大切なこととは。

安部　柔道をやってよかったと思える人生を歩んでほしいと思います。競技の上での勝ち負けは、その時点の結果にしかすぎません。ですが、柔道と出会った頃から死ぬまで、柔道から学ぶことは多くあります。

例えば、礼儀1つをとっても、今の世の中ではなかなか学ぶ場面がありません。ですが、道場に行ったら礼に始まり礼に終わる。道場全てが礼儀を学ぶ場所ですから、礼儀を学ぶには最適な場所が柔道場です。

礼儀が出来てくると、人間の基本、基礎が出来てきます。個人として人間が出来てくると、社会に貢献できる人間が育っていきます。

柔道で最も大事なことは、人間を形成することです。人間形成の方法として柔道があり、競技で勝つためだけにあるのではありません。社会に貢献できる人間をつくることが、柔道の最も大事な役割だと思っていますし、嘉納治五郎師範の教えでもあります。

――現在、柔道をやっている青少年に伝えたいことはありますか。

安部　勝ち負けで一喜一憂しないで、もっと大局に物事を考えてほしいと思いますね。各自の夢に向かって歩いていると思うのですが、柔道をやることで、大切なものを学んでほしいと思います。

他人を敬い、あきらめない強い気持ちを育て、柔道をやってよかったと心の底から思える人間になってほしいと思います。

――最後に、今後の抱負をお聞かせください。

安部　昨年はデンマークへ講習に行きました。ベルギー滞在中は、デンマークにもよく行きましたが、久しぶりに訪問して感慨深かったです。機会があればまた、昔訪問したヨーロッパ各地を訪れて、正しい講道館柔道を伝えていきたいと思います。

2時間のインタビューを終えると、安部十段は3階の会議室から、4階の参与室へ続く階段を軽々と上って行かれた。昭和後期から平成生まれの人間では想像もできないほどの苦労をなされた戦時中、そんなことなど一切感じさせず、明るくインタビューに答えていただき、感謝申し上げます。

◎安部一郎十段年表

年	できごと
1922年11月12日	秋田県に生まれる
1938年7月29日	講道館入門
1938年8月17日	初段
1939年8月15日	二段
1941年3月	群馬県立前橋中学校卒業
1941年4月	東京高等師範学校体育科第二部入学
1942年1月11日	三段
1944年1月9日	四段
1944年1月	陸軍特別操縦見習官として宇都宮陸軍飛行学校入校
1944年2月	朝鮮海州陸軍飛行教育隊に配属
1944年5月	朝鮮会文陸軍飛行教育隊に転属
1944年9月	東京高等師範学校体育科第二部卒業
1945年11月	復員

（注1）
- 生年月日　大正11年8月6日
- 拓殖大学商学部卒
- 武徳殿全国中等学校2年連続優勝
- 大学高専個人2年連続優勝
- 第1回国民体育大会個人優勝
- 皇宮警察柔道師範
- ベルギー国柔道師範
- 拓殖大学柔道師範

◇宮崎　淳　プロフィール

平成2年筑波大学体育専門学群卒業。
茗渓学園中学校高等学校教諭。
つくばユナイテッド柔道コーチ。

1946年1月	講道館秘書課奉職
1946年7月25日	五段
1947年3月	講道館退職
1947年4月	大阪府立岸和田中学校奉職
1948年4月	大阪府立和泉高等学校へ転任
1949年3月	大阪府立和泉高等学校退職
1949年4月	大阪府堺市警察本部奉職
1951年3月	大阪府堺市警察本部退職
1951年7月24日	六段
1951年11月	フランストゥールーズ市修道館倶楽部柔道師範就任
1953年11月	フランストゥールーズ市修道館倶楽部柔道師範を辞任
1953年12月	ベルギー柔道協会技術理事就任
1955年	欧州柔道連盟技術顧問就任
1957年11月20日	七段
1960年1月	ベルギー体育スポーツ協会所属ナショナルコーチ就任
1964年1月	ベルギー柔道協会技術理事再任
1968年	欧州柔道連盟技術顧問辞任
1969年1月	帰国

1969年4月	講道館国際部主事・指導員就任
1969年4月	全日本柔道連盟国際委員就任
1969年	アジア柔道連盟技術顧問就任
1971年4月	青年海外協力隊専門委員就任
1971年5月1日	八段
1972年4月	東京都立大学非常勤講師奉職
1976年4月	東京教育大学非常勤講師奉職
1977年4月	全日本柔道連盟国際試合選手強化委員就任
1977年	東京教育大学非常勤講師退職
1979年	アジア柔道連盟技術顧問辞任
1980年2月	太平洋柔道機構会長就任
1980年4月	講道館国際部長就任
1980年4月	全日本柔道連盟理事就任
1983年4月	アジア柔道連盟事務総長就任
1983年	東京都立大学非常勤講師退職
1985年4月	日本オリンピック委員会委員就任
1985年4月	全日本柔道連盟国際委員長就任
1986年	全日本柔道連盟国際試合選手強化委員辞任
1989年4月	全日本柔道連盟審判審査委員就任

1989年6月	日本オリンピック委員会委員辞任
1990年4月	全日本柔道連盟顧問就任
1992年4月24日	九段
1993年3月	全日本柔道連盟国際委員長・審判審査委員辞任
1994年6月	全日本柔道連盟理事辞任
1995年11月	アジア柔道連盟事務総長辞任
1995年11月	アジア柔道連盟名誉会員就任
1996年3月	青年海外協力隊専門委員辞任
1996年4月	参与、講道館国際事業本部副本部長就任
1997年4月	講道館審議会調査部長就任
1997年7月	太平洋柔道機構名誉会長就任
2004年4月	講道館審議部長辞任、昇段内規改正委員会委員長就任
2006年1月8日	十段
2006年3月31日	講道館常勤参与辞任
2006年4月1日	講道館非常勤参与就任

※参考文献：『青春！前中・前高柔道百年の歩み』平成12年、「柔道」平成18年2月号、『柔道名鑑』昭和40年

（年表作成：本橋端奈子）